芙蓉堂医館

杉本苑子

講談社

江戸芙蓉堂医館　七五〇円

著　者　杉本苑子

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
〒一一二―　振替　東京三九三〇
電話　東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）

印刷所　東洋印刷株式会社

製本所　黒柳製本株式会社

第一刷発行　昭和四十八年九月二十四日

©杉本苑子　昭和四十八年　落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

0093-301903-2253 (0)　(2文)　Printed in Japan

目次

天狗の辻　五
春の雪　四三
腹の中で猫が啼く　八一
花はさくら木　一一七
両国橋は長い　一五三
菊なます　一八九
師走の幽霊　二二三

裝幀　風間　完

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

江戸芙蓉堂医館

天狗の辻

1

表ががやがや、さわがしいので、半井信二郎は床を出てみた。
「おい、どうしたんだ。だれかいないか」
廊下に立って見まわすと、雨戸が一枚あいていて、外はまだ、うすぐらい。おまけに、へんな匂いが、むうッとなまぬるく、顔を包んだ。
「なんですの、あなた」
ねまき姿のまま、妻の弥生が追って出て、これも、
「甚太がきたんでしょうか」
眉をひそめる。
甚太というのは、盆にナス五十個、暮れに大根三十本、持ってくるのと引き替えに、月に一回ずつ、半井家の厠口へ汲み取りをしにやってくる葛飾在の百姓の名である。
「いや、それにしては臭すぎるし、時刻も少々、はやいようだぞ」
女中たちも起きだして、
「キャッ、どうしたの、この匂い……」
おたがい同士、鼻をつまみ合っているさなか、
「だんなさまッ」
いちはやく、外へ偵察に行ったらしい若党の一人が、
「たいへんです、表通りの四ッ角で、えらいさわぎがもちあがっています」
息せききってかけもどってきた。

「わかっている」
信二郎はおうようにうなずいた。
「うちにくる甚太かどうかは知らないが、百姓の汲み取り車が出あいがしらにぶつかって、桶の中身でもぶちまけたんだろう」
「そんなんじゃないんです。こ、こ、こんな太いやつが……」
両手の指で、さしわたし四、五寸ほどの輪をつくって、
「とぐろを巻いていやがるんです。まるで大蛇でさあ」
若党はわめいた。
「糞か？」
「あんなのをひるやつの尻の穴というのは、どんな大きさなんでしょうな」
女中たちのうしろから、
「一見の価値は、じゅうぶんあるわね」
と、このとき、涼しい声がひびいた。
「なんだ千鶴、おまえまで起きてきたのか」
邸内に居候している信二郎の妹である。朝露をふりこぼして、ぱっとひらいた水いろ桔梗みたいな、冴え冴えしい印象のむすめだ。
年は二十三――。腕っこきの女医などとは、とても見えない。愛くるしい目鼻だちをしている。
「一見の価値もヘチマもあるものか」
あわてて信二郎は牽制しかけたが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「診療の参考のためにも、珍奇な排泄物は観察の必要があるのよ」
屁理屈をこねて千鶴は庭下駄をつっかけ、あっというまもなくしらじら明けの靄の中へとび出して行ってしまった。
ねまきに羽織をかさねただけだから、
「いけません千鶴さん、そんなりで……」
弥生も思わず、大声をあげた。
いくらも年のちがわない兄夫婦の叱言になど、しかし日ごろから、ろくろく耳をかす気性ではない。
「しかたのないやつだ。行ってつれもどしてこよう」
寝所にもどって常着にきかえ、脇差だけさして信二郎は、そそくさ妹のあとを追った。
路地を出ると、臭気はいよいよ猛烈をきわめた。わるいことに向かい風だ。もろに鼻腔を刺激してくる。
「こいつはたまらんぞ」
表通りは、かけつけるヤジ馬で、はやくもごった返していた。
ここ、町名は宇田川町……。芝口から、金杉橋へかかる大通りをはさんで、商家が軒をならべている繁華街だ。増上寺へご参詣のみぎりは、将軍さまも通ろうという御成道である。
この大通りとぶっちがって、新銭座、鉄砲洲へぬける横通りの四ツ辻に、大ぜい人があつまっていた。
「あすこだな」
人立ちのどこへ千鶴がまぎれこんだか、見当もつかない。

それよりなにより、ヤジ馬の頭ごしに、辻のまん中を一瞥して、
「いやあ」
信二郎は、どぎもを抜かれた。
聞きしにまさる巨大さなのだ。若党は、大蛇と形容したが、三重、五重にわだかまって、先端が傲然、明けそめた天をにらんでうそぶいているありさまは、立ちのぼる異臭とあいまって、まさに一個の怪物であった。
「寄るなよ寄るなよ。雀、海中にはいって蛤となり、山の芋が鰻になるっていうからな。見てるまにこいつも竜かなんぞに化けやがって、昇天するかもしれねえぜ」
「ひとりでに天に昇ってくれりゃ大助かりだが、そうは問屋がおろすまいよ」
にがりきって言うのは町役はじめ、通りすじの旦那れんちゅうである。
ことに、四ツ辻の四方に五間間口の大店をかまえている四軒では、番頭、手代、小僧の末までが、
「いやだなあ、けっく片づけは、おれたちにおしつけられるんじゃないのかね」
と、うんの始末に、はやくもうんざりしきった顔つきだ。
最初に発見したのは、触れ売り商人のなかでは一番の出足を誇る納豆屋だという。
「げえッ」
あやうく、うすくらがりの中で衝突しかけて、
「た、たいへんだあ、起きておくんなせえ」
角の一軒をたたき立てているところへ、
「ええー、ひしお金山寺、醤油のもろみイ」

「菜漬け、奈良漬け、生姜はいーッ」
横通りの北と南から流してきた金山寺味噌屋、漬け物屋が、
「くさいな」
「どうしたこったね、こりゃ……」
近づいてくるなり、
「わあああ」
これも肩荷をほうり出して、尻もちをついた。
たちまち店々の大戸があく。くぐり戸があく……。さわぎは、それからはじまったのだそうである。
「いったい、どこのどいつがこんな大グソをたれやがったんだろ」
とは、だれもがきまって口にする疑問だが、首をひねるばかりで答など出るわけもない。
「わかったッ」
と、だから一人が、とんきょな声をあげたときには、みんなどよめいて、声のしたほうを注視した。
「こりゃあ、天狗だあ、とうてい人間業じゃねえ、天狗のクソにきまってらあな」
「ちげえねえ」
ヤジ馬は、さらにどよめいた。
「愛宕さまの天狗が、夜中のうちにたれて行ったおクソだぞ、きっと……」
横通りを三すじほどへだてた人家の向うに、愛宕山の黒い茂みが、こんもり見える一帯である。

「天狗にきわまった。天狗さんのおクソだ」
口から口へ、ざわめきが伝わるのを、
「ちょっと待ってよ」
張りのある声で制して、前へ出てきたのは半井家の千鶴だった。
「やあ、芙蓉堂の先生だッ」
「お嬢さん先生のご出馬だぜ」
またまた、ヤジ馬はどよめく。
どこでひろったか、千鶴は棒きれを片手に大蛇のそばへ寄って、
「天狗さんの落とし物にしては、ずいぶん人間のに似てるわねえ」
あちこち、つついたあげく、
「水を加えてこね返した形跡はあるけど、ひと種じゃないわ。色も固さも、さまざまな便が、入りまじっているようよ」
と断言した。
「うひょー、きたねえ」
「よしてくだせえよ先生、かき回すのは……」
「天狗のおクソですよう。もったいねえ。罰があたらあ」
逃げ腰になる群集をかき分けて、妹のそばへ走り寄ったのは信二郎だ。
「やめなさい、ばか」
腕をつかんで引っ立てた。
「ばかとはなによ。もう少し観察させてよ」

あらがうのをかまわず、
「帰るんだ」
ぐいぐいひきずって、屋敷へもどってきてしまった。
「力ずくはひどいわ。私は医者よ」
たとえ医者でも、嫁入り前のむすめが、衆人環視のまっただ中で天狗の糞をほじくりまわすなど、信二郎の常識からは、はみ出した行為だ。
「ねまきを着かえろ、みっともない」
叱られて、
「わッ、いけない」
やっとそこに、気づいたのか、柔かそうなくちびるの間から、舌の先をチロッと出して、千鶴は自分の部屋へ走りこんで行った。

2

井戸端へ廻って、こくめいに楊枝を使う。顔をざぶざぶやる。それでも臭気が、肌にまつわっている感じだ。
「父上、おはようございます」
七歳になる一粒種の小吉が、いつもの通り元気よく朝のあいさつをする。
「どうだね、父さんの身体、こやし臭くないかね？」
「ううん、臭くなんかないよ」
空はすっかり明け放れて、弱い冬日が、斜めに地上を照らしはじめている。

どうやら風向きがかわったらしく、ただよっていた悪臭も吹き払われ、海ばた近い町に特有の、潮の香のするさわやかな朝がもどってきていた。

「あなた、おいそぎにならなければ……。そろそろご出仕のお時刻ですよ」

家の中では妻の弥生が、おろおろ気をもんでいる。

小吉の手をひいて茶の間にはいり、朝餉の膳に坐ったが、

「こいつはやめよう」

生たまごの割り入れてある小鉢を、信二郎はさげさせてしまった。きまって二杯はかえる味噌汁の椀にも、今朝は食指がうごかない。ややもすると天狗の糞に、連想が走るのである。

「お嫂さま、お給仕は私がいたしますわ」

千鶴が茶の間へやってきた。

いつのまにか上から下まで、すっぱり身じまいを改めている。ほんのり、朝化粧までほどこした顔は、匂い立つようにあざやかだ。

「じゃ、おねがいしますね」

夫の出仕衣装をそろえるために、弥生は立って次の間へゆく。

なんのかの、口ではやかましく叱るものの信二郎は千鶴が可愛いくてならない。

兄妹の父は半井元養といって、幕府の奥医師に任じられている。将軍家、御台所、世子がただけを診る奥医師には、折り紙つきの名医ばかりそろえてあるが、元養はその筆頭で、官位も最高の法印だった。

市谷、田町の広壮な屋敷には、長兄が父とともに住んで、これも表御番医として公儀に出仕している。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com